

[先進地調査報告書②]

有限会社西における肉用牛短期肥育・出荷月齢の早期化推進の取組み

1. 地域の概況

有限会社西の所在地である鹿児島県南九州市川辺町は、薩摩半島の南部に位置しており、平成19年12月に近隣の知覧町、頴娃町と合併し、現在は南九州市川辺町となっている（図1）。

南九州市は、四季を通して温暖な気候であり、市町村別生産量で日本一を誇るお茶やさつまいも、畜産を中心とする農業が盛んで、全国有数の食料供給基地を形成し、豊かな食文化が息づいた地域としても知られている。

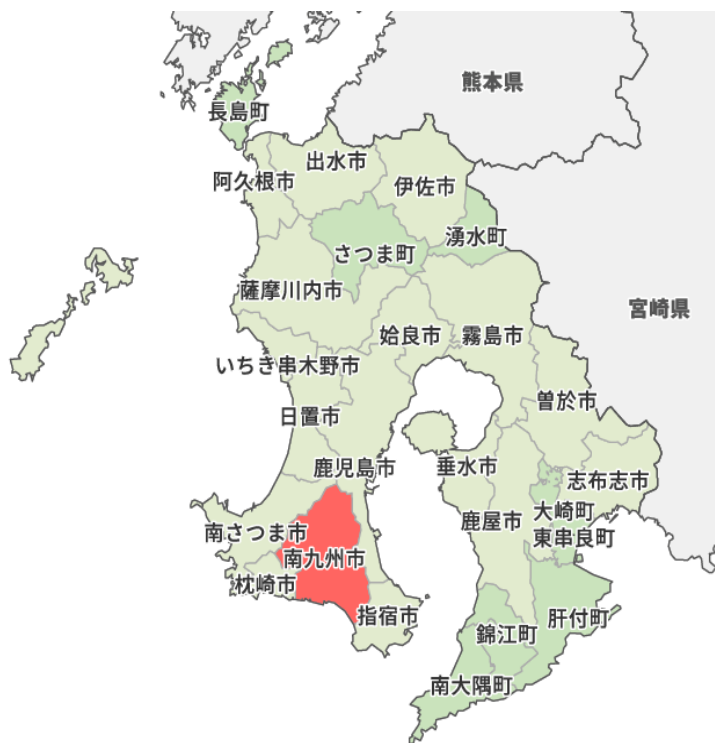


図1：南九州市の位置

2. 有限会社西について

有限会社西は、黒毛和種肥育の兼業農家から、後継者が就農したタイミングで繁殖事業を本格的に始め、将来的な事業の多角化を見据えて、平成17年に有限会社西を設立し、自然交配による繁殖から肥育までを自社農場にて行う完全一貫生産体制がスタートして現在に至っている。

本場となる第1農場は肥育牛舎、第1農場から1kmほど離れたところにある第2農場には繁殖・育成牛舎があり、2つの農場で飼養形態を分けて黒毛和種一貫生産に取り組む、旧肥育牛舎の増改築を行いながら徐々に肥育頭数を増やしてきた（画像1）。道路を隔てた新しい肥育牛舎は、借入を受けながら自費で建てるなど経営努力もされている。

現在も自然交配（初妊牛などは難産防止のため一部人工授精）、自然哺育、牧草生産やWCSによる高い自給粗飼料率を保ちながら規模拡大を進め、年間に生産される子牛は200頭を超えており、令和7年12月現在の肥育牛の飼養頭数は去勢190頭、雌180頭となっている。

また、繁殖雌牛全ての粗飼料を賄えるよう牧草地17ha、WCS30haの管理を行っているが、多頭数を管理する中で労働力は5名（長男、三男、長女、長女の子供夫婦）と家族間で業務を担い従業員は雇っていない。



画像 1：有限会社西（第 1 農場：肥育農場、第 2 農場：繁殖・育成農場）

3. 有限会社西の肥育期間短縮の取組みについて

現在の子牛市場価格は、脂肪交雑（サシ）を中心とした改良による産肉能力や肉質向上が進み、特定の種雄牛に利用が集中する傾向にある。また、枝肉市場における価格は、脂肪交雑の入りに優れた枝肉が重視され、高値で売買されることから、それらに伴う肥育期間の長期化と肥育経営を圧迫する飼料費・資材費高騰の常態化を受けた生産コストの上昇が課題となっている。

そのような中、有限会社西では繁殖肥育一貫生産体制を活かし、育成前期から肥育前期にかけて十分な粗飼料給与による腹づくりを意識した飼養管理を行うとともに、肥育期には飼料給与量の増加に伴う負荷やストレスをかけず、一般的な黒毛和種の出荷月齢よりも短い期間で飼養する肥育期間短縮を行っている。

4. 子牛の哺育・育成期について

有限会社西と他の農場との違いは種雄牛（去勢、雌の肥育で同等の成績を残せる雄牛の中から選定）を飼養しており、第2農場では棟ごとに種雄牛を配置して自然交配を行っている。人工授精については、繁殖ステージに応じた群編成により初回の種付を行う繁殖雌牛などに限定しながら行っている（画像2）。

生まれた子牛は3か月齢まで自然哺乳を行い、離乳後は育成期に移行するが、離乳後のストレスを最小限に抑えるため、適切な温度管理や敷料をこまめに交換するなど衛生面に配慮した飼養管理を行いながら（画像3）、10か月齢頃までは同じ粗飼料、配合飼料による自家配合したTMR飼料を給与している（表1）。



画像2 第2農場繁殖・育成牛舎内



画像3 第2農場育成房内

表1 子牛育成期の給与飼料の内容

給与期間	給与量
子牛育成期 3～10か月齢	配合飼料1：粗飼料：3.5になるように 配合した自家配合TMRを給与

5. 肥育期について

第2農場から第1農場（肥育牛舎）へ順次移動した後の群編成については、去勢、雌に関係なく、生まれてから出荷まで同じグループで飼養管理を行うようにしている。

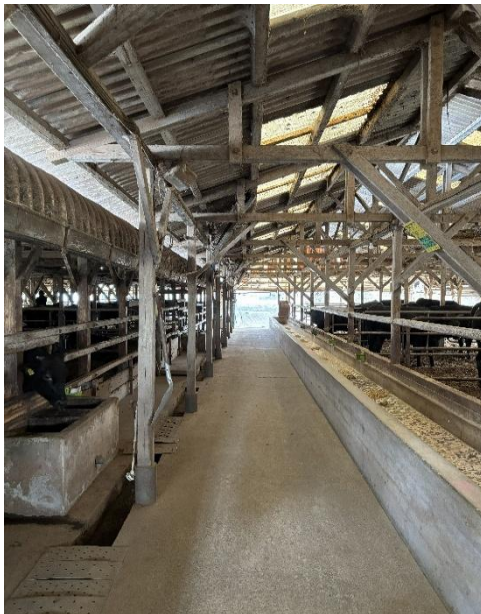
また、有限会社西では、肉用牛の飼養管理における快適性に配慮したアニマルウェルフェアを意識した飼養管理を実行するため、別棟の牛舎を含めて牛房面積に余裕を持った1区画4頭で飼養管理を行い（画像4～7）、牛舎内を快適な状態に保てるよう換気・送風以外にも断熱材を利用した牛舎環境の改善にも積極的に取り組んでいる。



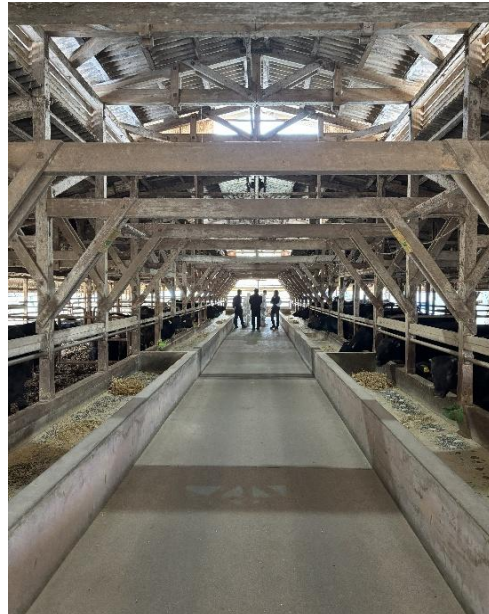
画像4 新しい肥育牛舎内



画像5 1区画4頭飼養



画像6 別棟の肥育牛舎内



画像7 別棟の肥育牛舎内

肥育期における配合飼料については、購入先の飼料会社と検討を行いながら配合割合を最終決定したものを給与し、粗飼料は稲ワラを給与している（画像8）。肥育期に入ると給与飼料も変わり、肥育牛に大きな負荷が掛かるため、採食状況を見ながらビタミン不足を補うためのオーツヘイや塩などを加えて自家配合した飼料をおやつ的なイメージで給与している（画像9～10）。

現在の肥育牛の95%が自家産で、外部から導入した肥育牛の出荷が完了するとすべて自家産に切り替わる。農場内では生産から出荷まで完結できるように役目を終えた経産牛の肥育も併せて行っており、肥育期に枝肉の仕上がりを意識した飼養管理を行うことで、肥育期間を短縮しても安定した枝肉成績につながっているものと考えられる（表2）。

敷料については、リサイクル加工製品として木くず類を再利用した敷料を購入して利用している（画像１１）。



画像８ 稲ワラ



画像９ オーツヘイ



画像１０ 自家配合飼料



画像１１ 敷料（リサイクル材）

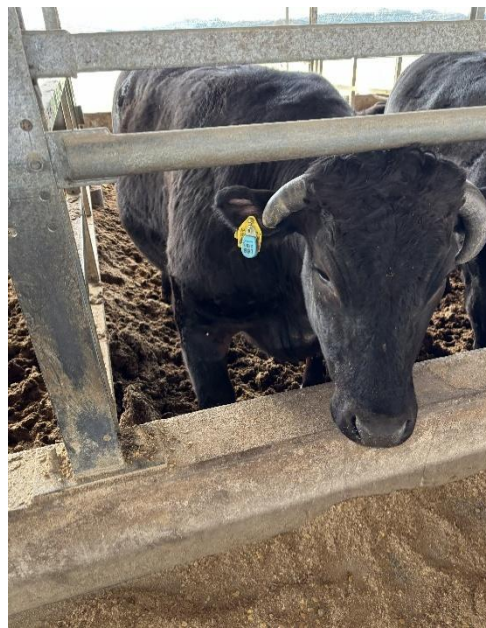
表２ 肥育期の給与飼料の内容

給与期間	給与量
肥育前期 １０～１８か月齢	配合飼料：７～１１kg／日 粗飼料：２～３kg／日
肥育後期 １８～２７か月齢	配合飼料：９～１０kg／日 粗飼料：１．５kg／日

また、受信機の電波の届く範囲に限られているが、肥育牛に U-motion（イヤタグセンサー版）を効果的に使用しており、夜間の立つ、座る、反芻などの動きも分かるため、直近では肥育牛の事故も起きていない（画像 1 2～1 3）。



画像 1 2 U-motion（親機）



画像 1 3 イヤタグセンサー

6. 肥育成績と主な出荷先について

有限会社西から出荷された肥育牛は、スターゼンミートプロセッサー株式会社と相対取引をしており、出荷頭数の 9 0 % 以上に相当する年間約 1 8 0 頭の黒毛和種と年間約 2 0 頭出荷される経産牛を東京や大阪などの枝肉市場平均からその日の BMS ごとに建値を決めて取引を行っている。

その他の肥育牛については、J A 食肉かごしま南薩工場へ未經産肥育牛の一部と枝肉共励会分を出荷しているが、同社から年間に出荷される頭数が事前に把握できることから安定した枝肉取引につながっているものと思われる。

売り先としては、関東エリア 5 割、関西エリア 2 割、九州エリア 3 割になり、近年はタイやベトナムなどの海外にも売り先を伸ばしている。

南九州市川辺町のブランド牛である「かわなべ牛」は商標登録もされており、同町の畜産農家で 1 5 か月以上飼育した黒毛和種で、規格は日本食肉格付協会で定める 4 等級以上で肉質などが特に優れた牛肉となっている。同社から出荷された黒毛和種牛肉もかわなべ牛として流通しており、南九州市のふるさと納税の返礼品にも選定されている。

同社の令和 7 年の肥育牛出荷成績を確認したところ、繁殖肥育一貫生産体制の強みを活かした結果となっており、育成期の成長に合わせた効率の良い増体が促され、肥育期間を短縮してもしっかりと枝肉重量が確保されている（表 3）。調査当日は、南さつま市にあるスターゼンミートプロセッサー株式会社加世田工場にて、同農場から出荷された 2 6 か月齢出荷の枝肉を見学させていただいたが、慣行肥育の枝肉に見劣りしない良好な肥育成績であった（画像 1 4）。

表3 令和7年1～12月出荷分の肥育牛出荷成績

項目	黒毛和種去勢	黒毛和種雌	農場平均
出荷頭数	92頭	83頭	175頭
枝肉重量	529.0 kg	457.7 kg	495.2 kg
胸最長筋面積	62.4 cm ²	54.9 cm ²	58.8 cm ²
ばらの厚さ	8.7 cm	7.5 cm	8.1 cm
皮下脂肪の厚さ	2.8 cm	2.8 cm	2.8 cm
歩留基準値	74.2	73.3	73.8
BMSNo.	7.5	6.3	6.9
BCSNo.	3.4	3.8	3.6
締まり	4.2	3.8	4.0
きめ	4.4	4.0	4.2

と畜日 令和8年1月23日
 格付日 令和8年1月26日
 出荷月齢 26か月齢
 性別 黒毛和種去勢
 等級 A5
 BMSNo. 9
 枝肉重量 540.2 kg
 胸最長筋面積 75 cm²
 ばらの厚さ 8.9 cm
 皮下脂肪の厚さ 2.6 cm
 歩留基準値 76.0



画像14 早期出荷牛肉の枝肉成績と枝肉画像

7. 肥育期間短縮の効果

有限会社西では諸経費の低減に務めながら収益の確保につなげており、肥育期間短縮の効果としては、肥育期間を短縮した期間分の飼料費が不要となることから、平均的な肥育経営と比較して肥育牛1頭当たり1～2割程度低くなっている(表4)。

表4 肥育期間短縮による1頭当たりの飼料費の低減効果

飼料費の低減効果
1日1頭当たり飼料費：690円（配合飼料＋粗飼料）
肥育期間2か月短縮（60日）
690円×60日＝41,400円／頭

8. 今後の展望等

令和7年4月に農林水産省が策定・公表した「家畜改良増殖目標」では、これまでの改良により獲得した和牛特有の強みである脂肪交雑を活かした牛肉生産ではなく、肥育開始月齢の適正化や肥育期間の短縮といった早期出荷等によるコスト低減の取組みを推進することとしており、その対応方針として、令和17年度の黒毛和種去勢肥育牛の肥育終了月齢を27か月齢にすることを目標として掲げており、全国各地で肥育期間の短縮が検討されている。

一方で、黒毛和種については、枝肉重量や脂肪交雑をはじめとする肉質向上を目指した平均29か月齢での出荷が一般的であり、その出荷月齢は肉質の向上と経済的な収益面を両立させ、高品質な和牛肉として枝肉市場でも高く評価されているが、近年では消費者ニーズの多様化で脂肪交雑に偏重しない特色ある牛肉も求められるようになってきていることから、今後は市場の変化にも柔軟に対応していくことも求められている。

有限会社西では、何か特別なことを意識して肥育期間短縮に取り組んでいる訳ではなく、繁殖肥育一貫経営のメリットを生かした育成から肥育まで無駄のない飼養管理から、出荷回転率の向上や自給飼料の生産などその他の部分で効率化を図りながら良質な和牛肉の生産を行っている。

同社ならではの飼養管理技術と創意工夫により、牛にやさしく、環境にもやさしく、ゆとりある持続可能な肉用牛生産の取組みは、今後さらに多様化する肉用牛経営の在り方を示す好例であると感じた。

参考資料

- (1) 有限会社西HP
- (2) 南九州市HP
- (3) 家畜改良増殖目標（令和7年4月 農林水産省）

（一般社団法人全国肉用牛振興基金協会）